※シーカ村のロープライン開通式で踊って喜びをあらわす川喜田二郎先生
（1975年3月26日撮影）

特定准教授 P.S. Associate Professor
博士（農学）Ph.D. in Agricultural Science

相馬 拓也
(Takuya SOMA)

日本地理学会2023年度春大会
2024年3月19日㈬

古写真でたどる川喜田二郎と ヒマラヤ保全協会の50年史

The 50-year History of Legacies by Prof. Jiro KAWAKITA and the Institute of Himalayan Conservation through old photographs

科研費 KAKENHI

Hakubi

KYOTO UNIV. WRC

Takuya SOMA LAB.

ヒマラヤの大自然を未来につなぐ国際環境NGO
NPO法人 ヒマラヤ保全協会
The Institute for Himalayan Conservation Japan

※パウダル村のロープラインで運ばれる木材を見守るKJ
（1975年2月24日頃撮影）

対象と方法

【対象資料】

- ❖ IHC川喜田文庫の古写真・映像の整理・検索
- ❖ 内部資料「シャングリラ」「議事録」の精査

【調査方法】

- ❖ IHC内部資料を「歴史史料」として読み直す
- ❖ ヒマラヤ保全協会の活動の意義と再考

【目的】

- ❖ 「川喜田式アクション＝リサーチ」の個性の理解

合計5,000枚以上のネガとポジの写真資料と8mmフィルムをデジタル化
当時の活動の実態に迫る。

川喜田二郎 略歴

KJ法

移動大学

ヒマラヤ保全協会の設立

野外科学の方法

研究成果の視覚化
メディア戦略

川喜田 二郎（1920～2009）
日本の地理学者、文化人類学者

▲シーカ村のロープライン完成当夜で踊る
川喜田二郎先生（1975年2月撮影）

▲筑波大学での最終講義（1984年2月17日）

▲ネパールで活動する生前の川喜田二郎先生（1975年撮影）

▲書籍とオリジナル映像作品

海外技術協力への哲学

「（中略）ATCHA（ヒマラヤ技術協力会）の動機のあと半分はヒマラヤの土地と人々へのわたしの愛情であり、それは三度の学術調査のご縁からうまれたのである」

『川喜田二郎著作集 (9)』p.295

現世と感動的につきあう能力を、回復しなければならない

「世界を悩む」

これが中核の思想である

「ヒマラヤでの仕事は語りつぎ言い継ぎゆかん、である。（中略）近頃はやりの自己実現などを最高の価値にしてはいない。」

ヒマラヤ保全協会. 1992.『第1回山岳エコロジースクール報告書』p.8

川喜田の最奥にある思想は、まさに人間賛歌そのものであった。

川喜田式アクション＝リサーチ

「人類学の研究成果を技術協力にいかに応用するかばかりが目立ち、その逆の視点が欠けている」※1

「民族学者が技術協力に深くかかわることを、本道から外れているとか主流から脱線したなどとうけとめるのは、認識不足である」※2

《縁の思想》を重んじた地域コミュニティへのとけこみ

→縁の導くフィールド調査を重んじ、「民族誌」の普遍化と普遍性を嫌がった。※3

※1 Peace corp.の設立(1961年)や、UN volunteer の開始 (1970年)に感化されつつも、批判的な見解も持ち合わせていたと思われる。
※2 川喜田二郎（編・著）. 1995.『ヒマラヤに架ける夢』文眞堂: p.27-28
※3 川喜田の姿勢は、クルト・レヴィン（MIT教授）が1944年に使用した用語“action research” に依拠しつつも、
実践面ではソル・タックス（シカゴ大学教授） (1907~1995)の示した“Action Anthropology”に多くの共通点がある。

ヒマラヤの大自然を未来につなぐ国際環境NGO
認定NPO法人 ヒマラヤ保全協会
The Institute for Himalayan Conservation Japan

ヒマラヤ保全協会の歩み

【ヒマラヤ保全協会 設立趣意】

「日本勢の総結集をし、お金のある向きはお金で、身体のある人は身体で、知恵や知識のある人はその知恵や知識で、と訴えたい」

川喜田二郎. 1990. 日本勢の総結集を目指す、ヒマラヤ保全協会の構想. PRAKRITI vol.2(no.1): p.5.

初　代：大来 佐武郎（1989～1993）［元・外務大臣／元JBIC総裁など］

2代目：川喜田 二郎（1993～2003）［東京工業大学・筑波大学教授］

3代目：水野 正己（2003～2013）［日本大学・教授］

4代目：渡邊 敏雄（2014～2016）

5代目：相馬 拓也（2016～）

大来 佐武郎
マグサイサイ賞 1971年受賞

川喜田 二郎
マグサイサイ賞 1984年受賞

ヒマラヤの大自然を未来につなぐ国際環境NGO
認定NPO法人 ヒマラヤ保全協会
The Institute for Himalayan Conservation Japan

ヒマラヤ保全協会の歩み

1970年～1977年

▲この5年後に実用機が18本架線された

▲IHCパイプラインの敷設により、はじめて水道がひかれた村は多い

▲ポンプへの4mの落水で約200mを揚水可能

1978年

ICIMOD設立の提言

1979年

▲ネパールRONSATとの共同プロジェクト。度重なる擬古と財政難から事業は中座した

1985年～

▲例年12月~翌1月、まで開催し、参加者30名、総収支が1,000万円を超える看板事業となる

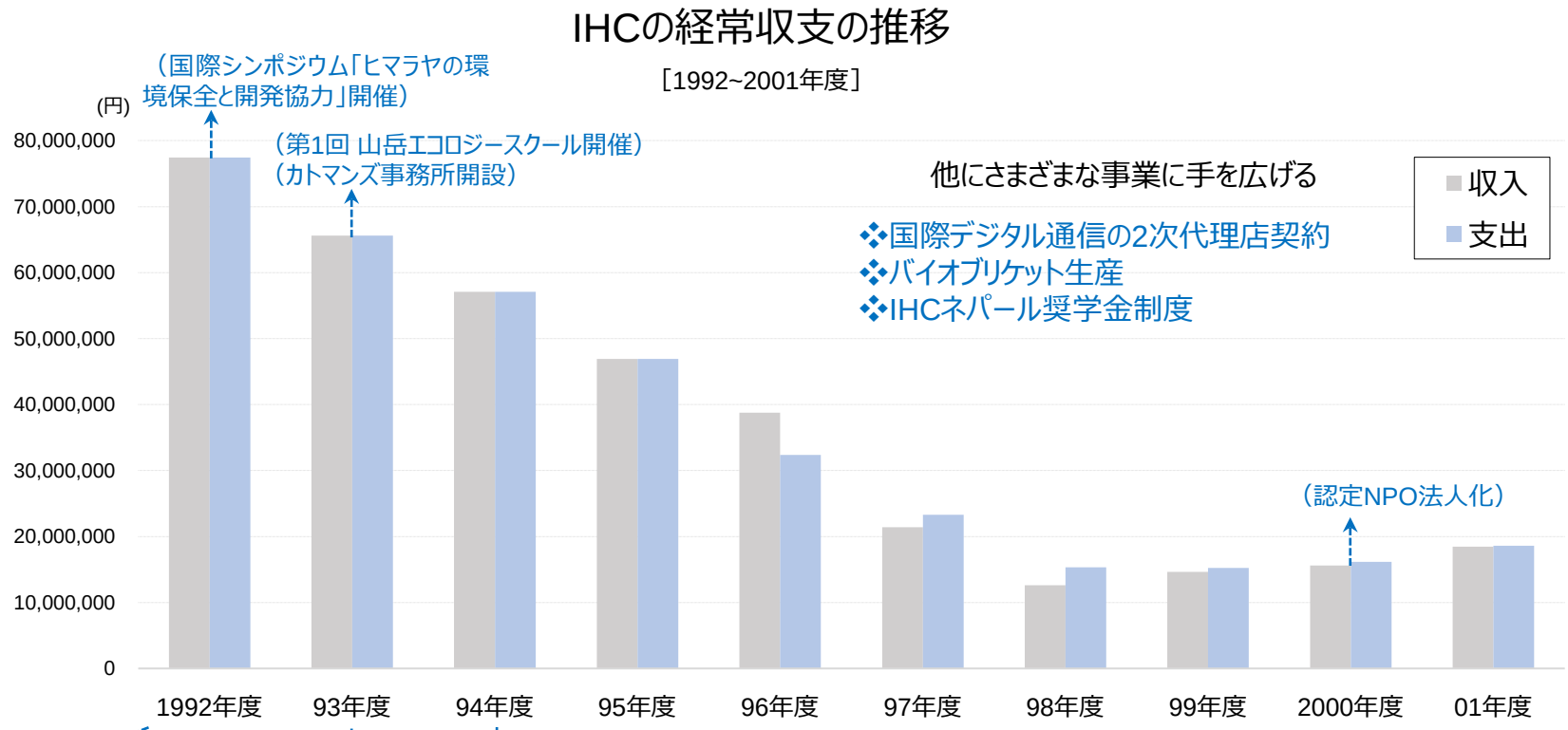
1989年～

▲現在のIHC環境保全活動の原型となる事業の開始

ヒマラヤの大自然を未来につなぐ国際環境NGO
認定NPO法人 ヒマラヤ保全協会
The Institute for Himalayan Conservation Japan

ヒマラヤ保全協会の歩み

アンナプルナ総合環境保全プロジェクト(1989年～)をおもに継承・発展する方向で活動中！



IHC「地球にやさしいカード」発行

ATCHAがKMTと合併
現在のIHCが設立される。

ムスタン・エコミュージアム開館

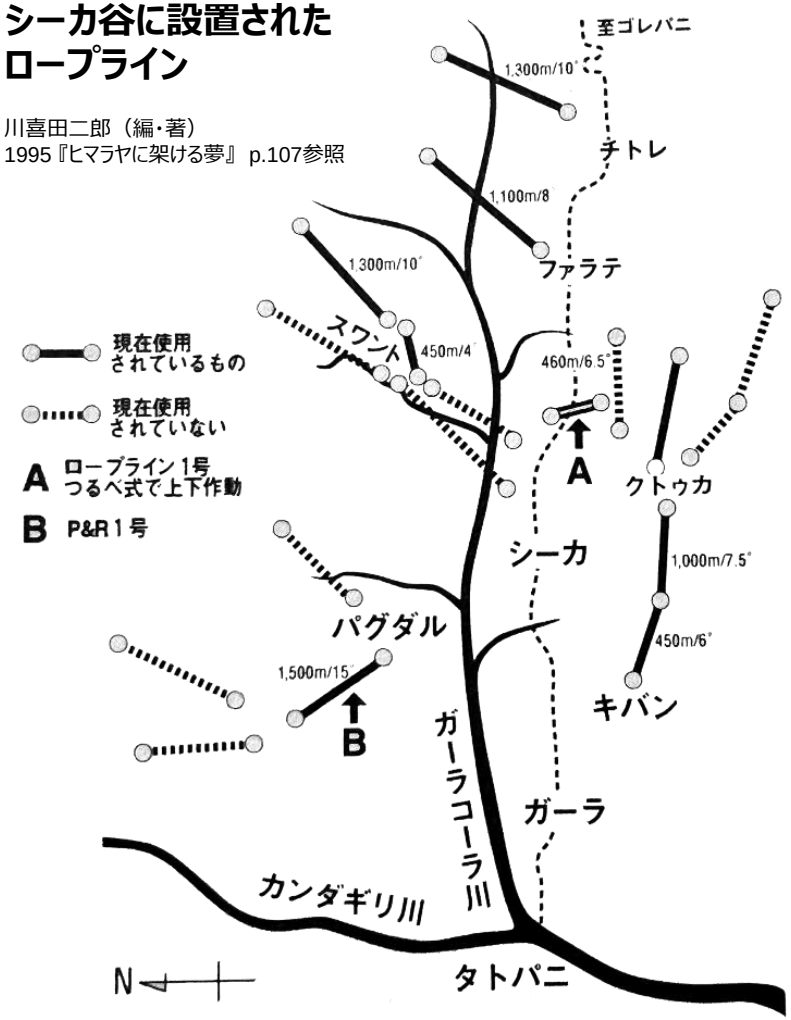
深刻な財政難に陥る

パウダル村チーズ工房設立（稼働2002年～）

パイプライン＆ロープライン事業［P&R］

シーカ谷に設置された ロープライン

川喜田二郎（編・著）
1995『ヒマラヤに架ける夢』 p.107参照



1970年：
シーカ村で試験架線を設置［A架線］ ➡支柱が倒れて失敗

1975年2~5月：
シーカ谷7ヵ村で着手。
合計18架線を整備した。
（軽架線の製作を㈱神鋼鋼線KKが特注）

▲瀬底大橋や幕張メッセ北ホールのワイヤー設置で実績

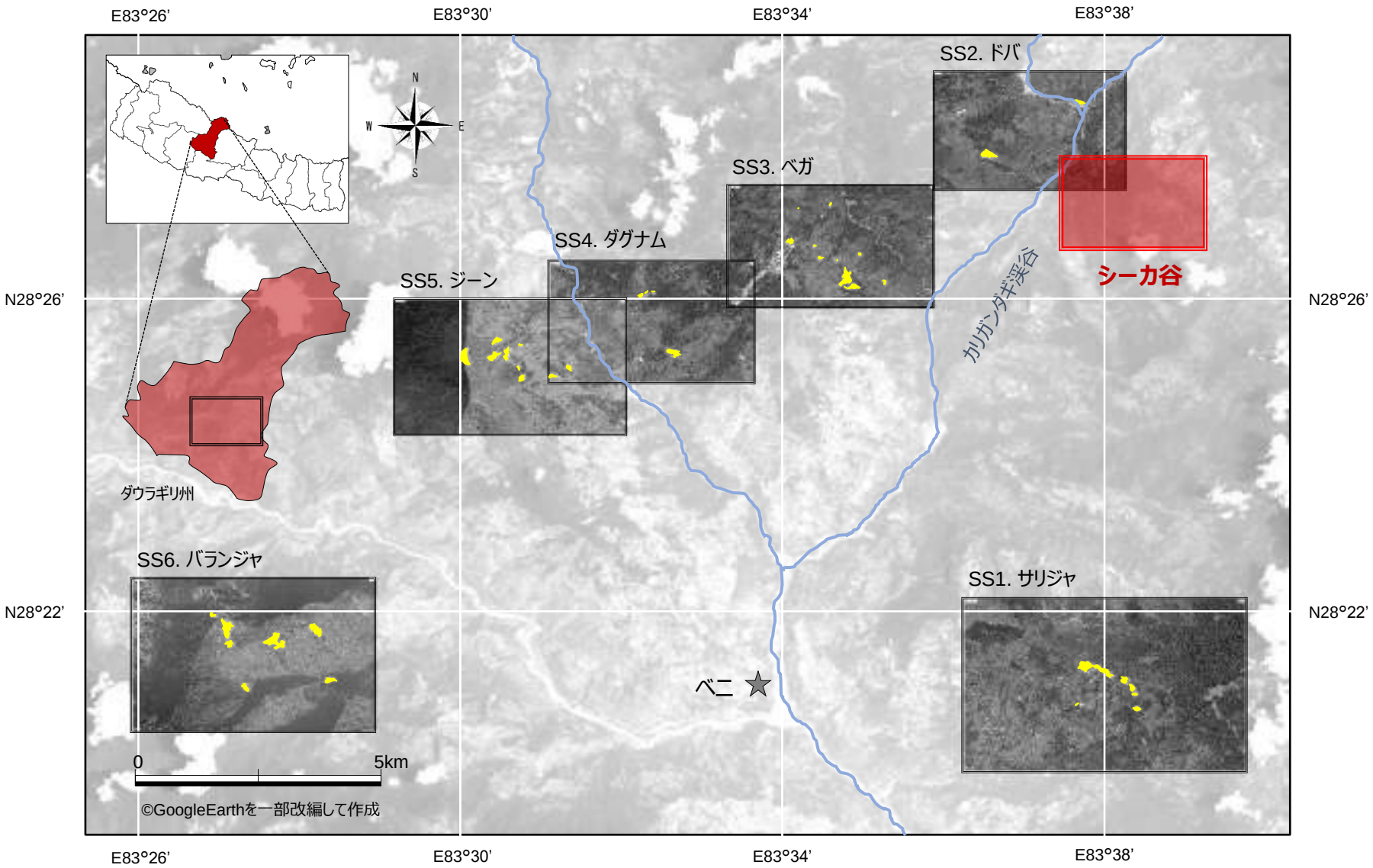
1975年2月24日：
ネパール国王戴冠式に合わせてパウダル1号線［B架線］で開通式

「終戦で陸軍から復員して間もなく、鳥取県の大山原野で過ごした僅かな開拓地生活が忘れられない。（中略）村人が裏山から担ぎ帰る山のような草や薪の重さが、身につまされた。こうして軽架線のアイディアに跳躍した」

川喜田二郎（編・著）. 1995.『ヒマラヤに架ける夢』文眞堂: p.27-28

ダウラギリ県パルバット郡／ミャグディ郡／シーカ谷

植林事業地の全域図



※自動車でのアクセスが可能な最遠隔農村を選定

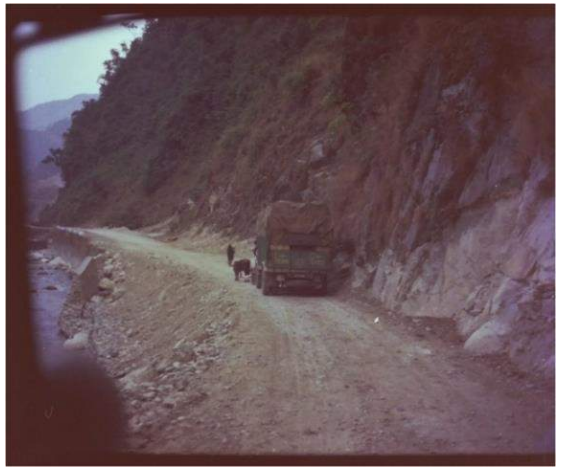
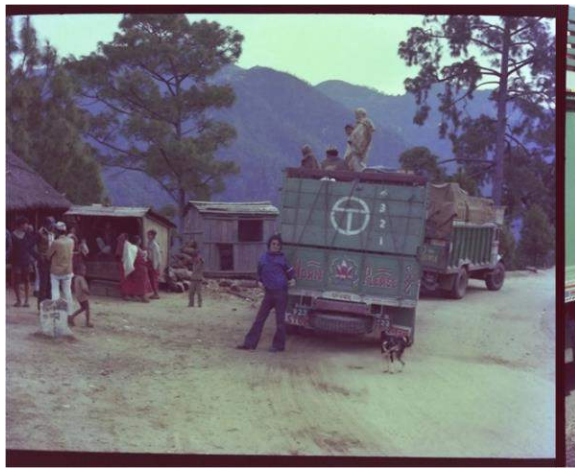
シーカ谷の暮らし

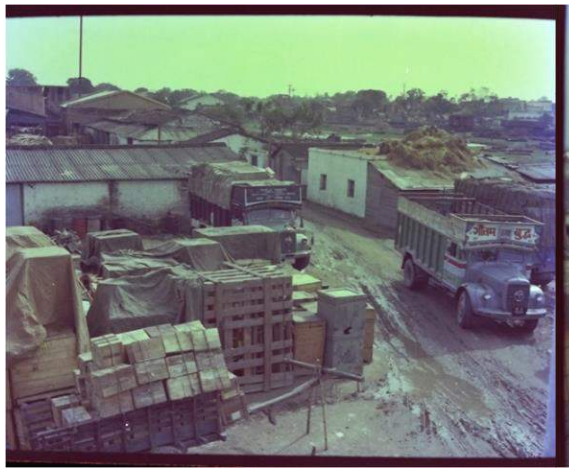
横転したり、滑落する車も多い荒れた道を行く

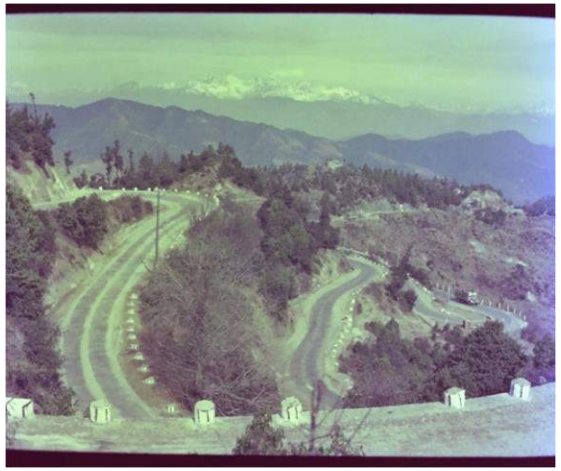
慣れればバイクも有効な交通手段

パイプライン＆ロープライン事業［P&R］

ポカラへの資材輸送





1975年1月29日：カトマンズからポカラまでＰ＆Ｒ資材を大型トラック2台に積載して輸送

パイプライン＆ロープライン事業［P&R］

シーカ谷への資材運搬

1975年2月3日：ポカラで荷下ろし後に、人海戦術でワイヤなどを担いで運搬した

パイプライン＆ロープライン事業［P&R］

シーカ谷への資材運搬

IHC「川喜田文庫」に、この方が撮影した（と思われる）8mmフィルムが現存！

1975年2月7日：KJと隊員たちは徒歩でシーカ谷へと向かった

パイプライン＆ロープライン事業［P&R］

パウダル1号架線の設置の様子

古写真資料
検索中
（８㎜フィルムの映像がありますので、こちらをご覧ください）

パイプライン＆ロープライン事業［P&R］

パウダル1号架線の開通式

▲ネパール国王の戴冠式に合わせて1975年2月24日、パウダル1号架線で開通式

▲終着点は村の中心地にいたる（現・ダウラギリ・ゲストハウスのすぐ上）

感極まったKJが一句読む

碧空に
雪山よぎり
ダウラ（薪）飛ぶ

KJ

パイプライン＆ロープライン事業［P&R］

川喜田先生と8名の日本人隊員たち

※いまとなってはお名前とお顔が一致しませんので、
ご存じの方がいればお教えください！

▲パウダル村でのロープライン設置を終えて（1975年2月17日撮影）

パイプライン＆ロープライン事業［P&R］

スワンタ村に現存するロープライン

▲到着点

▲使い古されたワイヤーフック

▲ワイヤー始点。かなり草木が繁茂する。

始点からみたスワンタ村の遠景

【構造】

架線全長1,300m／傾斜角10°

【利用】

少なくとも2015年頃までは使用されており、ワイヤーに破断箇所が多数あるものの、滑車の交換で現在も使用は可能。

【今後】

IHCヘリテージとして整備して保全したい考え

トリシュリ河川プロジェクト

1979年～

古写真資料
検索中
（発表までに見つかりませんでした・・・）

▲自然力渡河ボートを設置したガトベシ村（1号機）とガイガート村（2号機）

ジョムソム地域開発センター

ムスタン・エコミュージアムの開設

1994年3月～

【沿革】

ムスタン王国への外国人入境解禁（91年10月）とともに計画・始動し、1994年3月に開館

【予算】

IHCおよびロータリークラブなどで総額2,000万円程度で建設・整備を実施した。

▲村人でにぎわう館内

パウダル村チーズ工房の設置

2002年～

▲村人から毎朝、牛乳を買い取って生産する。現在は毎日8頭の牛から約50ℓのミルクを得ている

▲売上収入は2名のチーズ職人と、村内唯一の学校の設備や教師の賃金として補填される。

苗畑運営による稚幼木・果樹苗の生産

［2017年～］

▲サリジャ村のナーサリー。年間最大で10,000本の稚幼木を生産している。

有用樹によるモノづくりと女性のエンパワメント

［2010年～］

▲機織り工房（サリジャ村） ※ヒマラヤイラクサによるテキスタイルつくり

▲紙漉き工房（サリジャ村） ※ネパールジンチョウゲによる紙つくり

果樹栽培のアグロフォレストリー

［2017年10月～バランジャ村］

▲キウイ栽培の協力農家さんを募集し、各戸10～15本を無償提供。栽培試験区でのマルチング（敷藁）や実生苗の育苗にたずさわっていただいた（2019年4月）

▲レモンの栽培試験区では500株を植栽した（2019年4月／7月）

▲協力農家よりご提供いただいた栽培試験区

ポカラ駒ヶ根公園＆バシュンドラ公園の桜植栽

ヒマラヤ保全協会50周年記念事業

▲市民の憩いの場でもあるバシュンドラ公園(5.35ha) の湖畔。サクラ植栽による景観整備が期待されている。
（2024年1月）

▲ポカラ駒ヶ根友好公園(5.1ha)のサクラ植栽予定地
（2024年1月）

▲ポカラに設営した新規ナーサリー。
サクラの接ぎ木苗の生産拠点として稼働（2024年1月）

ヒマラヤの大自然を未来につなぐ国際環境NGO
認定NPO法人 ヒマラヤ保全協会
The Institute for Himalayan Conservation Japan

これから10年間の事業計画

IHC50周年を迎えた節目のいま、ネパールを継続しながら、
中央ユーラシア～ムスリム社会も含めた人類と環境のあらたな共生観を模索したい！

- ☑ パウダル村チーズ工房の販路拡大とブランド化
- ☑ パウダル村に改良乳牛と種雄を導入
- ☑ 養蜂と地場ハチミツの生産
- ☑ ハウス栽培による新規農作物の導入
- ☑ キルギス＋タジキスタンでの苗畑設置と植林事業

- ☑ ムスタン・エコミュージアムの地域拠点力強化
- ☑ 特任研究員制度の設立
- ☑ IHC奨学金・研究助成事業

とくに女性に頑張ってもらいたいお仕事！
（※女性の就労支援や収入向上を目的にしています）

川喜田式アクション＝リサーチの個性と特徴

【予算】　莫大な予算と助成金により支えられていた

【産学官】　経済界・産業界を有機的にアカデミアに連結した

【住民参画】　地域での住民参画の姿勢を貫いた

【アウトプット】　一般向けの図書・視覚メディアで成果を公開した

【環境教育】　草の根で住民の環境保全意識を醸成した

地理学を「働く学問」へと昇華させた

社会実践のあたらしいモデルで山岳農山村の開発ニーズに応えた